

令和2年度 第二回 学校評議員会記録

令和3年2月15日（月）午前9時30から午前11時分

参加者 学校評議員：河内園子 様、内藤允昭 様、橋田憲司 様、林のぶ 様
原田唯司 様はオンライン参加

本校職員：校長、副校長、事務係長、小学部主事、中学部主事、高等部主事、教務主任



高等部ビデオ参観



協議等

1 内容

(1) 校長挨拶

コロナ禍で運動会や、ふようまつりなどの行事は、縮小したり分散したり工夫をしながら取り組んできた。今年度の学校経営について忌憚のない御意見を伺いたい

(2) ふようまつり高等部演技のビデオ参観

(3) 意見交換

発言者	発言内容
河内評議員	＜卒業生について＞ 卒業後の生活についての相談が多い。学校に卒業後の相談できる場所やサポートをする場があれば良いと考える。
原田評議員	＜卒業生の決意表明より＞ 自分の言いたいことを表現できるようになり、成長を感じる。自分のことを主張できる生徒に育った。
林評議員	在学当時は心を開ける場所。卒業後にも学校に求めるものがある。
橋田評議員	＜あおい講座＞ 学校卒業後10年20年の方が入ってきている。年齢層が上がってきており、会社や事業所での勤務についてうまくいかないことがあるなど、課題が出てきている。卒業とともに課題が完了することではない。そのために、学校も含めて、多様な相談の窓口があると良い。
林評議員	＜相談機関について＞ 一つのところに就職したら続けることではなく、立ち止まることも必要。卒業後の相談窓口として、身近な相談機関があることのアナウンスがあるとよい。
校長	＜繋がれる場＞ 新成人を祝う会など、節目で学校と繋がっている。卒業生の話を聞く機会がある。繋がりをもつことのできる、励ましあえる場があると良い。

内藤評議員	<p><登下校の旗振りで></p> <p>自転車の通学生が名前を呼んでくれ、「床屋行ったの？」と聞いてきたり、「いつもありがとうございます。」と話してくれたりした。他にもエピソードがある。学校の先生ではない評議員に話をしたことで心が解放されていると感じた。</p>
-------	--

2 副校長より

(1) 校内行事の感染症対策

コロナの影響で制限はあるが、運動会やふようまつり、修学旅行など、今までとしては違った見方もでき、別の楽しみ方を見つけることができた。

(2) 欠席数

第1波、2波、3波と波は着ているが、本校では感染者を出さずにすんでいる。

感染症対策として、学校再開の予算でサーマルカメラの設置、マスクや消毒の補充などを行い安心して学校生活を送ることができるように整えている。

3 学校評価

(1) 安心安全な学校では、心と体を守ることの授業実践。

(2) 感染拡大防止の観点からの指導。

(3) 会議終了時間を提示したことなどによる、業務対応方法の工夫。

(4) 一人一授業研や学部間の交流。具体的に見ることで繋がり意識ができる実践。

(5) 図書利用について、上級生が下級生に対しての読み聞かせの実践。

(6) 感染の拡大が新たな交流の形を創出した城北高校との交流。

(7) 教科専門の教授からの指導を得た授業づくり。

何を達成できたのか具体的に評価できるようにしていきたい。

4 評議員より

(1) 感想と質問

発言者	発言内容
原田評議員	<p><大学との連携、協力について></p> <p>教科専門の先生が加わっていることは、新たな動き。12年間をとおして、一貫して基礎的な教科の力を身に付けることが大事。学校として基礎的な学力を身につけるうえで教科の先生の力が欠かせない。</p>
副校長	<p><令和3年度の重点項目></p> <p>自分の心と体を守るために、Covid-19を掲げた。</p> <p>「生活を切り開く」を前面に、「何を指すのか」を明確にする。今後の未来に対してどう変化しようとも自分で課題を解決しながらやる姿、自分らしく生きていく姿を目指す。</p> <p>大学と連携は、愛教大、三重大、等々、附属学校との連携についても模索。研究フォーラムは、「行きたい。」といわれるものにしていきたい。</p> <p>ゴールを目指した学校経営。</p>
橋田評議員	<p>附属学校の役割として教育実習がある。コロナが収束しない中で可能な方策を考えているか。方向性があるのか？</p>
副校長	<p>教育実習は中止。学校としては準備をしていた。他校ではできない教育実習を考えた。大学として学生をどう守るかの判断をしてもらえればと思う。</p>

校長	大学では、休校措置も取られた。代替措置として教育体験を行った。次年度は、感染状況を見ながら新たに実習を考える。
佐野中主事	<p><中学部の研究より></p> <p>数の設定、本当にこれでいいのか、子供たちの学びあう学習文化をどう作っていくのか。まだまだやるべきことがたくさんあることが分かった。基礎的なことを教えてきたつもりだったが、教科の系統性の大切さがわかった。</p>
副校長	数学：教育課程全体にかかわってくる。全体のどこに位置づけるのか。子供たちにどう伝えていくか。
河内評議員	<p><生活に返す教科について></p> <p>生活にどのように結びついているか知ってもらいたい。生活にどう結びつくか。本人たちの理解度からどのように数学を進めるか。</p> <p><自己評価について></p> <p>新しいゴールに向かって 継続していく文化ということで進め、評価が「A」になったから終わりではなく続けること。</p>
原田評議員	<p><コロナの中での展望></p> <p>終息した後でも、マスク消毒は標準化される。コロナの前の行事、運営、コロナが収まったから元に戻るのではなく、コロナありで環境の中でどう作っていくか課題。コロナが収まったうえでどのように経営していくか。今までのようにきめ細やかな、子供と接しながらというのはできにくくなる。授業の在り方の方向性、現時点での考え</p>
大石小主事	<p><心と体を保つ></p> <p>コロナ対策で接しながらの指導支援ができなくなった分、意図や目的を精選。新しい生活様式のマスク、消毒などを習慣化していくために、何のためにやるのかをきちんと先生が説明していくことを来年度も継続。</p>
原田評議員	小学部は接触が多いから、何のためにという目的をはっきりさせること
齊藤高主事	オンラインを進めた。顔の見える関係で安心できる。情報機器を試した。通常登校でもできることで、ICTを活用
佐野中主事	目的を精選。友達顔がわからないと不安な様子があった。多かれ少なかれ不安を抱えている。ICTを活用することで教育の幅が広がっていく。
副校長	何のためにやるのかということをいつも話題としている。目的に沿ったものを提供する。

5 校長より

研究について3年間言い続けてきた。先生たちが附属を出てからもずっと研究を進め、研究の視点で授業づくりしてもらえたらと考えている。個々の研究を話し合ったりしている。研究紀要、学会発表などできてきた。さらに学校が発展できるように支援いただけたらと思う。